

# 2021 夏休みすいせん図書 ～本の森へ～



西東京市図書館

# 1・2年生

## 「ぼんやきゅう」

指田和文 長谷川義史 絵／ポプラ社

つなみのまへの年まで、なつのおぼんのじきにやっていたぼんやきゅう。7年ぶりのぼんやきゅうは、つなみでなにかもながされてしまったなか、きせきてきにいきのこったゆうしょうきをあらそって、6チームのさんかで、おこなわれた。

岩手県で、60年いじょうつづくやきゅうたいかいのおはなしです。



## 「きんぎょびじゅつかん」

松沢陽士 写真 高岡昌江 文／ほるぷ出版

きんぎょは、さかななのに海にも川にもいない。なぜなら、きんぎょは人がつくったさかなだから。まっ赤なからだの琉金、まっ黒な出目金、すらっとながい和金、さまざまいろやかたちがたのしいきんぎょたち。この本では、びじゅつかんの絵のように、色あざやかなきんぎょのしゃしんをがくぶちにいれてくわしく紹介します。



## 「なんみんってよばないで。」

ケイト・ミルナー さく こでらあつこ やく／合同出版

あんぜんにくらせないから、このまちをでていかななくてはならないの。と、おかあさんがいった。なかよしのひとたちにさよならをいって、もっていくものをきめて、すんでいたまちにさよならをいうの。それから、おかあさんとてをつないで、いっしょにあんぜんなところへいこう。「なんみん」としてにげることになった親子のお話。



## 「きみひろくん」

いとうみく 作 中田いくみ 絵／くもん出版

きみひろくんは、ゆうとうせい。かけっこははやいし、一年生になる前に、名前をかんに書くこともできました。クラスみんなはきみひろくんのことをソンケーしています。でもぼくは、ちょっとりこまっています。なぜなら、きみひろくんは、ぼくにだけうそをつくからです。ふたりのひみつのぼうけんがたのしいおはなしです。



## 「はるかちゃんが、手をあげた」

服部千春 作 さとうあや 絵／童心社

二ねん二くみのほとんどの人は、はるかの声をきいたことがありません。学校で話すのがこわくて、はずかしくてできないのです。ある日、大きな声のあきらくんが話していたことが自分といっしょだとおもったはるかは、その日から学校でいろいろなきもちになりました。



## 「小さな赤いめんどり」

アリソン・アトリー 作 神宮輝夫 訳 小池アミイゴ 絵／こぐま社

ひとりぼっちでくらすおばあさんは、びんぼうだけれどはたらきもの。はなしあいだがほしいとおもっていたある夜、小さなめんどりがやってきて、ふたりはなかよくくらしはじめます。ふしぎな力をもつめんどりは、おばあさんのしごとをどんどんてつだってくれました。たのしくてふしぎなおはなしです。



## 「みんなとおなじくできないよー障がいのあるおとうととボクのはなしー」

湯浅正太 作 石井聖岳 絵／日本図書センター

ボクはおとうとがすき。でもいっしょにいと、ボクのこころはグチャグチャになる。おとうとのやることはいつもおそい。はしってもころんでばかり。おしゃべりはつかえるし、もじはグニャグニャ。でもあるひ、おとうとが「みんなとおなじくできないよ」といったんだ。障がいのあるおとうととボクのおはなしです。

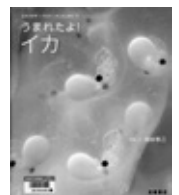


## 「うまれたよ！イカ」

櫻井季己 写真・文／岩崎書店

ヤリイカのなかまが、いりえにあつまってきました。メスのイカがうんだたまごは、4かめにふくらみ、35にちめによくあかちゃんとなって、たまごのふくらから、からだのさきをだします。

ヤリイカがうまれるようすをみることができるしゃしんえほんです。





# 3・4年生

## 「おうさまのこどもたち」

三浦太郎 作／偕成社

おうさまは、こどもたちをよび「おうこくをひきつぐものをきめようとおもう。まちへでて、どのようにすればよいか、みてきなさい」と、いいました。まちへとびだしたこどもたちはかえってきて、それぞれどんな「おう」「じょおう」になりたいのか、おうさまにはなしはじめました。いろいろなしごとのようすが、わかります。



## 「ポリぶくろ、1まい、すてた」

ミランダ・ポール文 エリザベス・ズーン 絵 藤田千枝 訳／さ・え・ら書房

西アフリカガンビア共和国に住むアイサトは、村に捨てられたポリぶくろをじぶんたちでなんとかかしようと立ち上がりました。これからもきれいな村でくらしたいけるように、彼女がとった行動とはなんだったでしょう。一人一人の行動が地球環境を変えるきっかけになることがよくわかる1冊です。



## 「しあわせなときの地図」

フラン・ヌニョ文 ズザンナ・セレイ 絵 宇野和美 訳／ほるぶ出版

ソエがうまれてからずっとくらししてきた、だいすきな町。でも、戦争のせいで外国に逃げなければならなくなりました。ソエは町の地図をひろげて、たのしいことがあった場所にしるしをつけてみました。じぶんの家、おじいちゃんの家、学校や図書館。しるしをつけるたびに、あたたかいおもいでがよみがえります。



## 「大坂城のシロ」

あんずゆき 著 中川学 絵／くもん出版

サチは、大坂城から歩いて半日ほどの村に、おとうとくらししている。ある日ふたりは、山菜をとりでかけた山道で、あばら骨のうきでた白い犬と出会った。そして、その犬を「シロ」と名づけて、家に入れ、家族のようにくらしはじめる。そのシロが、役人ととらえられ、大坂城にいる虎のえさとして、つれていかれた。シロはどうなるのだろうか？ 大阪で言い伝えられている、豊臣秀吉の時代の物語です。



## 「セイギのミカタ」

佐藤まどか 作 イシヤマアズサ 絵／フレーベル館

守の悩みは、だれかにじっと見られると、顔が赤くなってしまうこと。クラスで「トマトマン」とからかわれるのが、嫌なのに何も言い返せない。もっと困るのは、そんな時にやってくる「セイギのミカタ」だ。「空気を読みたい」守と、「空気を読まない」周一。自分を変える勇気をくれる、不思議な友情の物語です。



## 「おじいちゃんとの最後の旅」

ウルフ・スタルク 作 菱木晃子 訳 キティ・クローザー 絵／徳間書店

ぼくのおじいちゃんは入院している。おじいちゃんはがんで怒りっぽいし、きたない言葉を使うので、パパはあまりお見舞いに行かない。家に取りに行きたいものがあるというおじいちゃんのために、ぼくはいつしよに病院をぬけ出す計画を立て、実行に移した。おじいちゃんがどうしても家に取りに行きたかったものは？

おじいちゃんと孫のふれ合いをえがいた作品です。



## 「百年後を生きる子どもたちへー「帰れないふるさと」の記憶ー」

豊田直巳 写真・文／農山漁村文化協会

福島県浪江町津島。この豊かな自然の中にある山里に、470戸ほどの人びとが暮らしていました。しかし、2011年3月、原発事故でもれだした放射性物質が、25kmも離れた津島にも大量に降り注ぎました。住民たちは、突然、津島を追われ、避難し、今も帰ることができません。だれもいなくなった家や田畑には草木が生え、その姿を変えていきます。「ふるさと」津島の現実と住民たちの想いを写真で伝えます。



## 「知ってる？郵便のおもしろい歴史」

郵政博物館 編・著／少年写真新聞社

みなさんは、はなれた場所でコミュニケーションをとるときはどうしますか。今では当たり前のように「メール」や「手紙」でしょうか。文字や紙がなかったころはどうしていたのでしょうか。昔は伝書バトを使った方法もありました。ヨーロッパでは、「肉屋郵便」といって、肉屋が肉を配達するついでに、手紙や小包を届けていたそう。「郵便」や「切手」がどのように発達していったのかが、わかります。



# 5・6年生

「ヒロシマ 消えたかぞく」 指田和 著 鈴木六郎 写真／ポプラ社

わたしはとこやのおとうさん、おかあさんやきょうだい、イヌとネコとくらしている。いまは戦争をしてるっていうけど、ベンキョウもあそびもめいっぱい！昭和20年8月6日、広島に原子爆弾が落とされるまでの、ある家族の生活を描いた写真絵本です。なにげない毎日をすごせる平和の大切さが伝わってくる一冊です。



「凸凹あいうえおの手紙」 別司芳子 著 ながおかえつこ 絵／くもん出版

ぼくの小学校では毎月1回、総合学習の時間に地域のおじさんやおばあさんを招待して、全校で交流会をしている。ぼくは、「佐山さん」に交流会のお知らせの手紙を届けることになっている。でも、佐山さんからだけ返事が来ない。心配になって、佐山さんちに行ってみると白い杖をついた人が帰ってきた。あの人が佐山さんなのかな。点字について学ぶことができる本です。



「ぼくと母さんのキャラバン」 柏葉幸子 著 泉雅史 絵／講談社

僕たちが住む八巻市と、巨大ネズミが住む向こう側の世界とが、30年ぶりにまじわった。巨大ネズミから、夜明けまでに向こう側の世界へ母さんにとどけてほしいものがあると云われたが、なぜか母さんが家にいない。夜明けまでにはとどけないと。僕が母さんの代わりに、向こう側の世界を目指す冒険物語です。



「流星と稲妻」 落合由佳 著 講談社

熊のような巨体の善太は六年生。飽きっぽい剣道だけは続けている。ある日、授業で同じクラスの剣道経験者、宝と試合をすることになった。宝は東京から転校してきた、小柄で気弱な少年だ。楽勝と思っていた善太だったが、「面抜き胴」をあざやかに決められてしまう。数日後、宝は善太が通う剣道クラブに入ってきた。「根性なし」「ビビリ」とからかわれていた二人が、かけがえのないライバルになるまでの物語。



「ジュリアが糸をつむいだ日」 リンダ・スー・パーク 作 ないとうふみこ 訳 いちかわなつこ 絵／徳間書店

ジュリアは韓国系アメリカ人。親友のパトリックと、サークル活動の自由研究で、カイコを育てて生糸をとることになった。子どものころ、韓国でカイコを飼っていたジュリアの母さんの提案だ。乗り気なパトリックに対して、「韓国っぽい」研究がやりたくないジュリア。だけど、カイコを育てていくうちに、だんだんかわいく思えてきた。カイコの飼育を通して、さまざまなことを知っていくジュリアたちの成長の物語。



「<死に森>の白いオオカミ」 グリゴリー・ディーコフ 作 相場妙 訳 デイム・レシコフ 絵／徳間書店

むかしのロシアのいなかの村でのお話。先祖がすみついてきた川ぞいの村には、古くからの言い伝えがあった。それは「川のむこう岸の森に人間が手を出してはいけない」というもの。ところがある日、若者たちが土地をひろげるため、森を焼き払ってしまう。するとまもなく<死に森>と呼ばれるようになったこの森で、村人たちがオオカミに襲われるようになる。ロシアの昔話を元にした、少し不思議でこわいお話。



「東海道53次―歴史と文化を訪ねる日本の古道・五街道 1―」 永山多恵子 文／教育画劇

江戸時代に、徳川家康が整備して二代将軍秀忠が定めた政治的、軍事的に重要な道である五街道。日本橋を起点とした東海道、中山道、甲州街道、日光街道、奥州街道の5つです。この本では、最も重要な東海道をとりあげ、ゴールの京都の三条大橋までの当時の宿場町のようすや、街道にまつわるできごと、文化などをはばひろく紹介しています。この本を読むと、街道の役割がわかります。全3巻です。



「まなぶ」 長倉洋海 著／アリス館

勉強ってなんのためにするのか？湖の上や、標高4000メートルの高原、マイナス50度の極寒の地。さまざまな国や地域のこどもたちがいろいろなことを「まなぶ」姿を写真で伝えます。本を読みたい、自分の名前を書きたい、好きなことをもっと知りたい！あなたも自分だけの「まなぶ」理由を見つけてみませんか？

